

「小児保健実習」の授業内容の評価

－保育者の視点からの考察－

上山 和子・貞岡 美伸・福原 博子*・岡 宏美

小児保健教育

Lecture Evaluation of "Child Health Practice"

A Study from a Viewpoint of Childcare

Kazuko UHEYAMA Minobu SADAOKA Hiroko FUKUHARA Hiromi OKA

(2004年11月10日受理)

幼児教育学科の「小児保健実習」の授業内容の評価について、保育者の視点から必要性を検討した。その結果、食事の与え方では、離乳食の項目で全員が必要性を認識していた。健康児への生活援助では、成長・発達の指標となる身長・体重・胸囲測定に関する項目の必要性が高かった。また、健康観察では、子どもの健康状態の把握となる体温・呼吸測定に関する項目の必要性が高かった。次いで病気と異常時の対応では、事故に対する初期手当の方法に関する項目の必要性が高かった。今後の授業内容の方向性として必要性の高い項目については、小児保健の基礎的技術を確実に習得出来るように事例や事故の起こりやすい場面設定を用いた授業方法の検討が必要なが示唆された。

はじめに

本学では、保健・医療・福祉・教育のそれぞれの特徴を生かしながら専門職の人材を育成する教育が行われ、関連性のある分野においては学科を越えて相互に教授している。その一つである幼児教育学科の「小児保健実習」の科目を看護学科の教員が担当している。

しかしながら、看護学科の教員は本来看護学生の教育を担当しているため、看護の視点で捉えた授業内容を展開している傾向がある。そのため、実際に子どもの保育に関わっている保育者は、小児保健の基礎的知識や技術としてどのような内容を必要としているかについて実証し、保育の現場が求めている内容と「小児保健実習」の授業内容

とを比較検討する必要があると考える。保育の現場からの報告例としては、小児保健の一つである事故防止について石井¹⁾は、保育施設での事故防止と発生時の対応の重要性を取り挙げている。また、小児保健全般に関する保育者からの視点として堀井²⁾は、保育に必要な事項と行うべき事項で小児保健の項目を取り挙げて小児保健の知識を踏まえて実践出来ることを報告している。したがって、保育者の小児保健の認識を踏まえた授業内容の検討が重要である。

本論では、「小児保健実習」の授業内容を評価し、今後の方向性の示唆を得ることを目的として保育者に調査を行い、検討したので報告する。

*元新見公立短期大学助手

1. 研究目的

保育者を目指す学生に必要な小児保健の実践内容を保育者の視点から明らかにし、今後の授業の方向性の示唆を得る。

2. 研究方法

- 1) 調査対象：岡山県南のA保育園の保育者32名。看護師1名を含み、経験年数1年から36年の全員女性である。
- 2) 調査方法：自記式質問紙による留め置き法。施設長より説明してもらい調査に同意を得られた場合に提出してもらった。
- 3) 調査時期：2003年7月
- 4) 調査内容：「小児保健実習」の演習項目に関する自記式の質問紙を作成した。調査内容は健康な児への生活援助項目（身体測定・健康観察・乳幼児の扱い方・身体の清潔法・身体の鍛錬）および病気と異常時の対応（食事の与え方と看護技術・応急処置）について『かなり必要』『どちらかと言えば必要』『あまり必要ない』『全く必要ない』の4件法で実施した。講義のみで演習を伴わない項目の演習の必要性の有無では、健康な児への生活援助、病気と異常時の対応（罨法・対症看護・応急処置・けがその他の処置）について『必要あり』『必要なし』の2件法で実施した。
- 5) 分析方法：項目別に単純集計し、健康な児への生活援助および病気時の対応に関しては、『か

なり必要』『どちらかと言えば必要』を『必要あり』、『あまり必要ない』『全く必要ない』を『必要ない』として分析した。

- 6) 倫理的配慮：この研究以外には使用しないこと、匿名性の保持について説明した。

3. 保育のための小児保健の定義

小児保健の定義として今村³⁾は、小児保健の主要な部分を占める乳児・幼児を対象とし、健全な子どもを育てるための知識のもとに身体発育と精神発達をはかり、積極的に健康づくりに取り組むことであると述べている。つまり、乳幼児の健康の維持増進を図ることとしている。高内⁴⁾は、保育にとっての小児保健の定義として専門家としての保育者には、小児保健における子どもの発達や疾患についての知識や技術を学び、保育の場で実践力を高めていくことが大切であると述べている。このことより、実践の立場である保育者として乳幼児に対しては、適切な栄養、養護を行い、病気や事故の予防に努め、日々の保育を通して実践していくことと言えよう。

4. 結果

質問紙は32名に配布し32名より回収した（100%）。その内、有効回答者数は28名（87.5%）であった。調査結果を健康な児への生活援助、病気と異常時の対応、演習項目の必要性の有無の項目別に述べる。

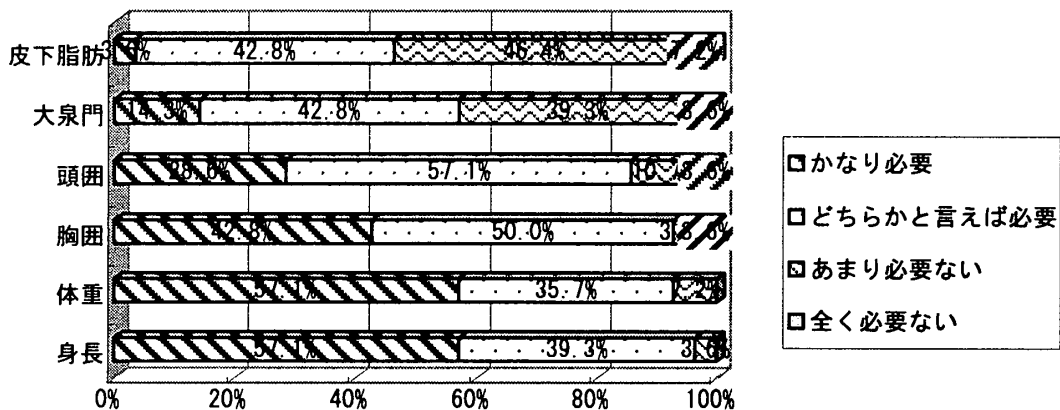


図1 身体計測の必要性

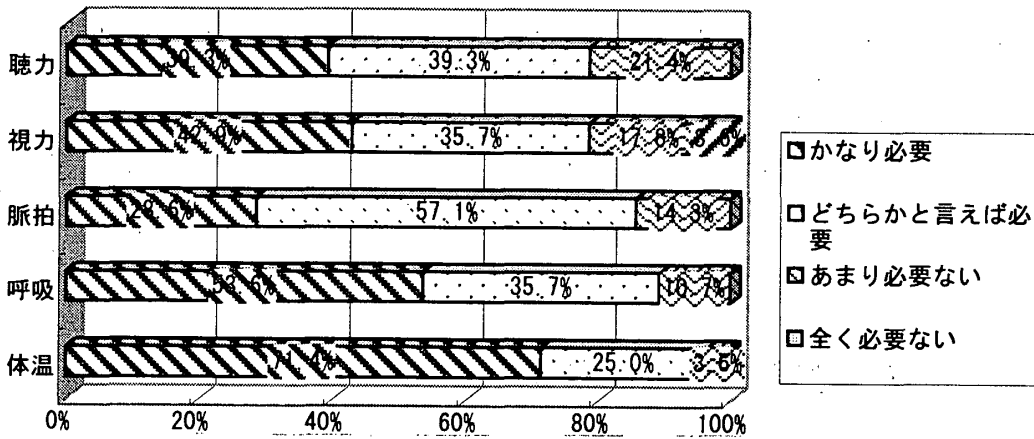


図2 健康観察の必要性

1) 健康な小児への生活援助

(1) 身体計測 (図. 1)

身体計測では、身長測定は『かなり必要』57.1%、『どちらかと言えば必要』39.3%、合わせると（以下『必要あり』とする）96.4%であった。『あまり必要ない』3.6%、『全く必要ない』0%、合わせると（以下『必要ない』とする）3.6%であった。体重測定は『必要あり』92.8%、『必要ない』7.2%であった。胸囲は『必要あり』92.8%、『必要ない』7.2%であった。頭囲は『必要あり』85.7%、『必要ない』14.3%であった。大泉門は『必要あり』57.1%、『必要ない』42.9%であった。皮下脂肪は『必要あり』46.4%、『必要ない』53.6%であった。

身長、体重、胸囲測定の3項目は、9割以上が必要性を認識していた。しかしながら、大泉門および皮下脂肪は必要性の認識は低かった。

(2) 健康観察 (図. 2)

健康観察では、体温は『必要あり』96.4%、『必要

ない』3.6%であった。呼吸は『必要あり』89.3%、『必要ない』10.7%であった。脈拍は『必要あり』85.7%、『必要ない』14.3%であった。視力は『必要あり』78.6%、『必要ない』21.4%であった。聴力は『必要あり』78.6%、『必要ない』21.4%であった。体温測定は9割以上、次いで呼吸は9割弱が必要性を認識していた。

(3) 乳幼児の扱い方 (図. 3)

乳幼児の扱い方では、抱き方は『必要あり』96.4%、『必要ない』3.6%であった。衣類の着脱は『必要あり』96.4%、『必要ない』3.6%であった。おむつ交換は『必要あり』96.4%、『必要ない』3.6%であった。おんぶは『必要あり』89.3%、『必要ない』10.7%であった。

抱き方・衣類の着脱・おむつ交換の3項目とも9割以上が必要性を認識していた。

(4) 身体清潔法および鍛錬 (図. 4)

身体の清潔法および鍛錬では、沐浴は『必要あ

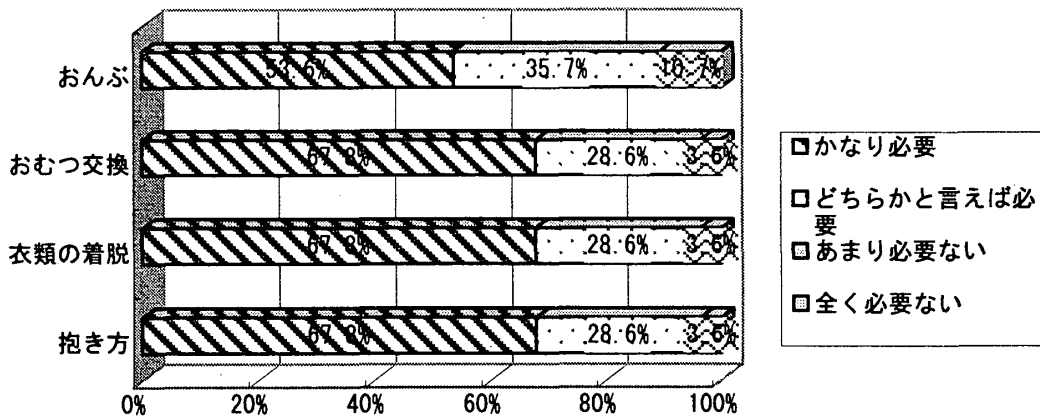


図3 乳幼児の扱い方の必要性

り』78.6%、『必要ない』21.4%であった。清拭は『必要あり』71.4%、『必要ない』28.6%、であった。乳児体操は『必要あり』89.3%、『必要ない』10.7%であった。外気浴は『必要あり』89.3%、『必要ない』10.7%であった。

乳児体操・外気浴ともに9割弱が必要性を認識していた。

2) 病気と異常時の対応

(1) 食事の与え方と看護技術 (図. 5)

食事の与え方では、授乳は『必要あり』96.4%、『必要ない』3.6%であった。離乳食は『必要あり』100%であった。消毒法は『必要あり』92.8%、『必要ない』7.2%であった。薬の飲ませ方は『必要あり』92.8%、『必要ない』7.2%であった。浣腸は『必要あ

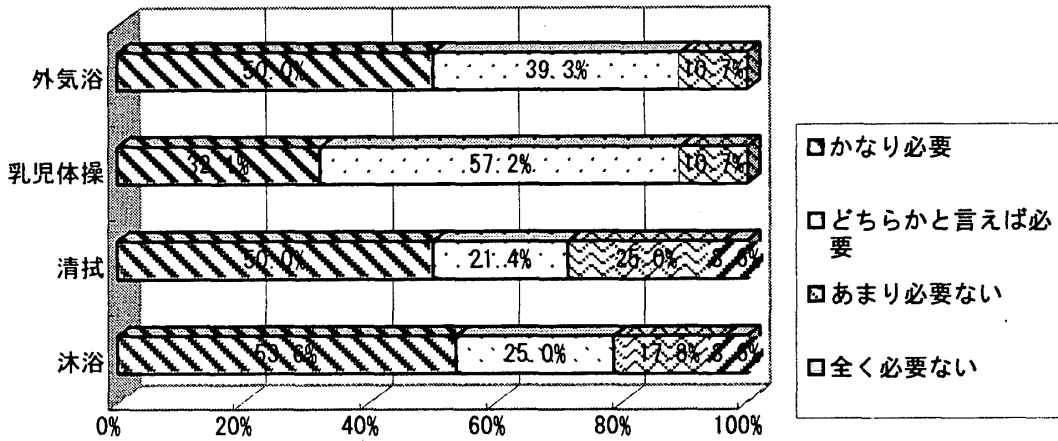


図4 身体の清潔法および鍛錬の必要性

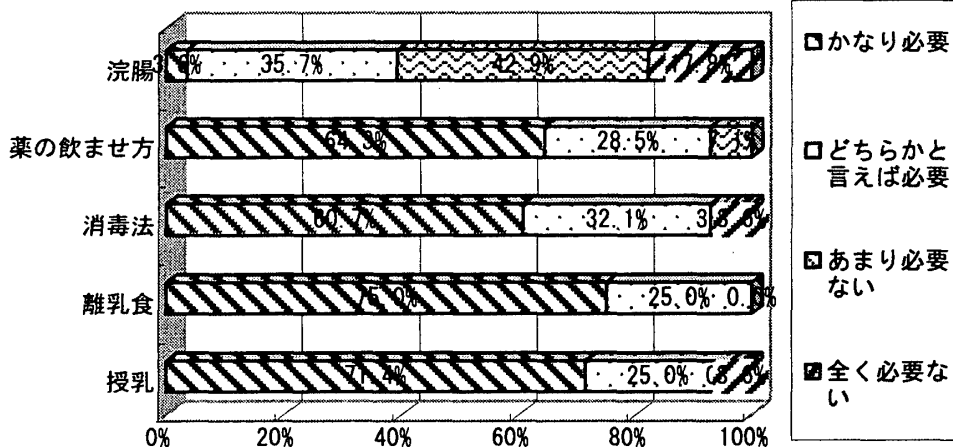


図5 食事の与え方と看護技術の必要性

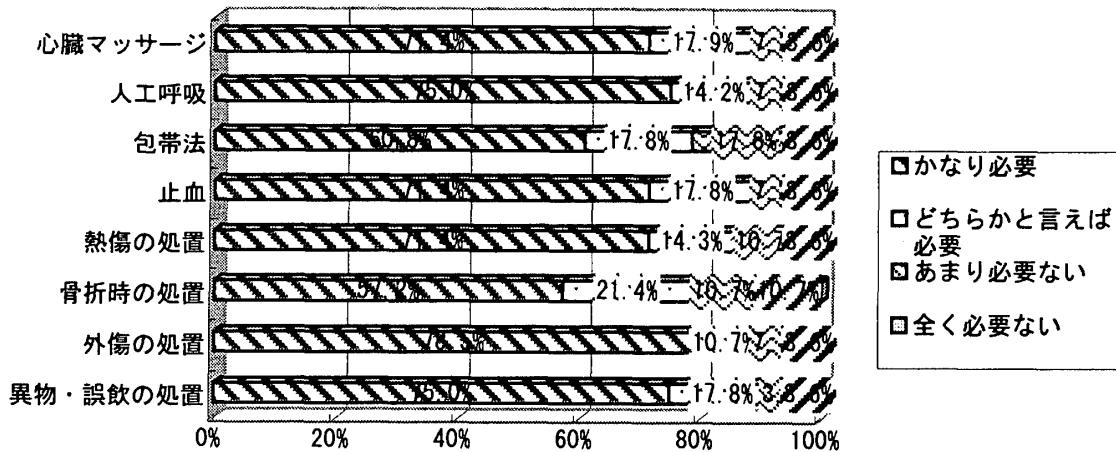


図6 応急処置の必要性

「小児保健実習」の授業内容の評価

り』39.3%、『必要ない』60.7%であった。

離乳食は全員が必要性を認識していた。しかしながら、浣腸は6割弱が必要なしと認識していた。

(2) 応急処置 (図. 6)

応急処置では、異物・誤飲の処置は『必要あり』92.8%、『必要ない』7.2%であった。外傷の処置は『必要あり』89.2%、『必要ない』10.8%であった。骨折時の処置は『必要あり』78.6%、『必要ない』21.4%であった。熱傷の処置は『必要あり』85.7%、『必要ない』14.3%であった。止血は『必要あり』

89.2%、『必要ない』10.8%であった。包帯法は『必要あり』78.6%、『必要ない』21.4%であった。人工呼吸は『必要あり』89.2%、『必要ない』10.8%であった。心臓マッサージは『必要あり』89.2%、『必要ない』10.8%であった。

異物・誤飲の処置は9割以上、外傷の処置、止血、心肺蘇生法である人工呼吸・心臓マッサージともに9割弱が必要性を認識していた。

3) 健康な児への生活援助および病気と異常時の対応の演習項目の必要性について

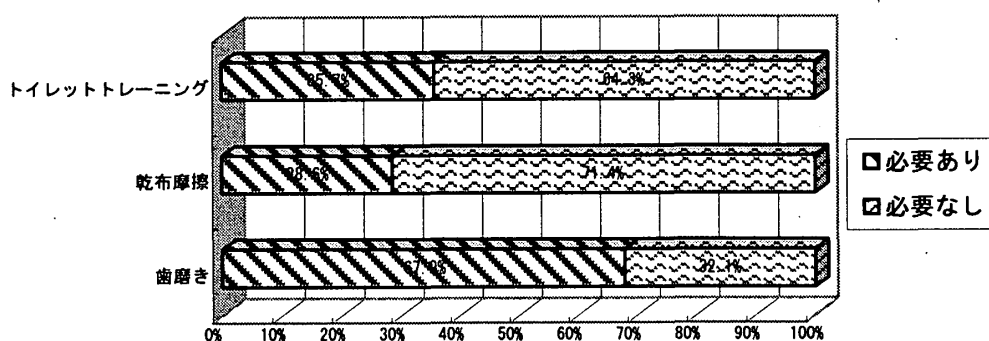


図7 健康な児への生活援助の演習の必要性

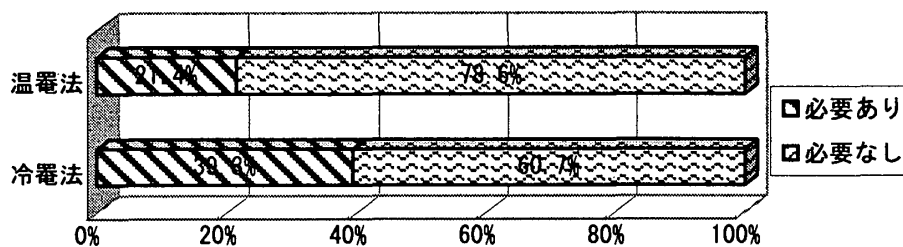


図8 病気と異常時の対応—電法の演習の必要性

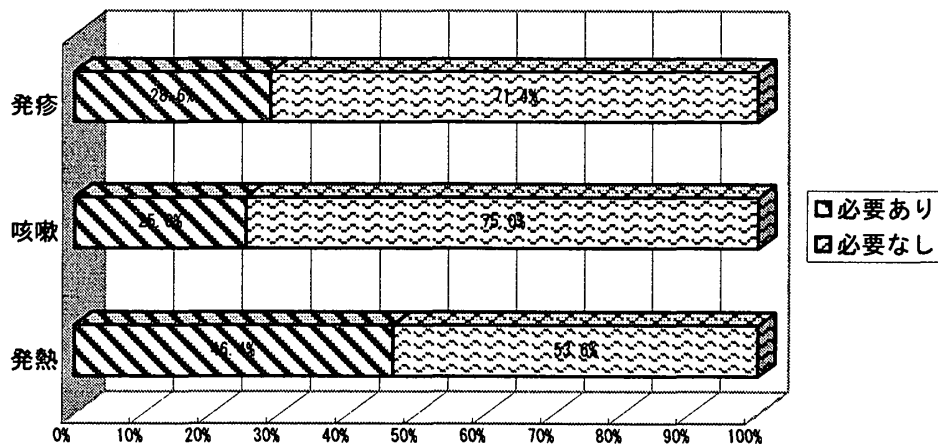


図9 病気と異常時の対応—対症看護の演習の必要性

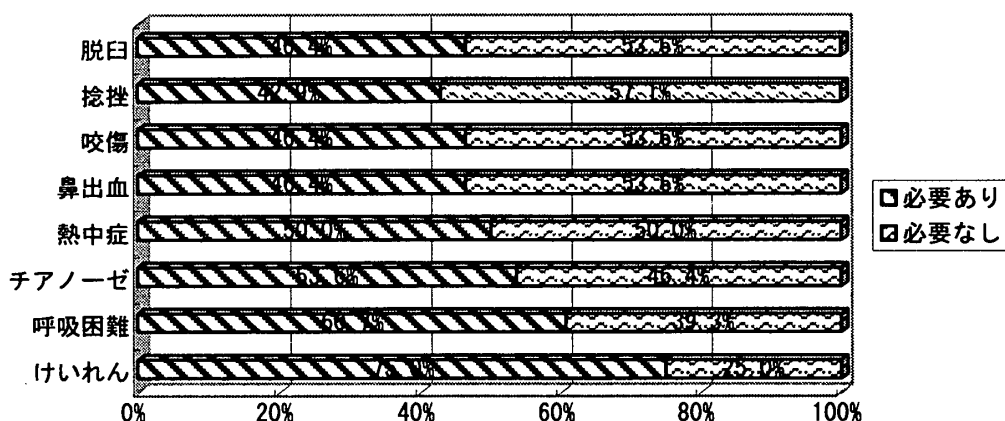


図10 病気と異常時の対応—応急処置・けがその他の演習の必要性

授業内容の項目として講義だけでなく、演習が必要と思われる項目について取り挙げた。

(1)健康な児への生活援助 (図. 7)

健康な児への生活援助では、歯磨きが67.9%と必要性が高く、次いでトイレトレーニング35.7%、乾布摩擦28.6%であった。

(2)病気と異常時の対応 (図. 8・9・10)

電法では、冷電法39.3%が『必要あり』で、温電法は、21.4%であった。

対症看護では、発熱46.4%が『必要あり』で、発疹28.6%、咳嗽25.0%であった。

応急処置およびけがでは、けいれんが75.0%と必要性が高く、次いで呼吸困難60.7%、チアノーゼ53.6%、熱中症50.0%、鼻出血46.4%、咬傷46.4%、脱臼46.4%、捻挫42.9%であった。

5. 考察

1) 保育者の「小児保健実習」の授業内容に対する必要性の認識の実態

(1)身体測定

身体測定に関しては、毎月定期的に測定が行われているため、必要性が高かったと思われる。特に身長・体重・胸囲に関しては発育の目安となり、成長・発達を見つめる保育者にとっても重要な項目と考えられる。乳幼児の場合、標準的な発育の指標となる意味からも知る必要性が高いと思われる。大泉門および皮下脂肪については、成長・発達の異常時を知る目安としては必要性が高いが、日常生活では必ずしも必要性が高いとは認識され

ていなかったと考えられる。

(2)健康観察

健康観察に関しては、特に体温・呼吸の項目の必要性が高い。年少児は、体温調節機能が未熟であるため、食事や運動、環境温度の影響を受けやすく発熱しやすいという特徴があり、乳児クラスでは定期的に体温測定が行われているため、必要性が高かったと考えられる。また年少児では発熱を伴う感染症に罹りやすいこともあり、体温測定は異常の早期発見につながると考えられる。次いで呼吸に関しては、特に乳児期では、乳幼児突然死症候群が乳児死亡の3位を占めている⁵⁾ことから予防するために睡眠中の呼吸状態の観察が行われており、必要性が高かったと考えられる。乳幼児突然死症候群については、健やか親子21⁶⁾に取り上げられたり、保育所においては定期的に研修会が行われていることから、小児保健対策の重要課題の一つと考えられる。脈拍測定は、体温・呼吸に比べて低いのは、健康状態を観察する指標の一つとして体温に比べ、変化を捉えにくいことから必要性が低かったと考えられる。子どもを観察する場合、頭からつま先の方向へ、全体から細部へと見ていく。子どもは予備能力が少なく変化しやすいことと、免疫機能の獲得過程である時期から考えてもバイタルサインに関する項目は必要性が高いと考えられる。

(3)乳幼児の扱い方

乳幼児の扱い方については、特に抱き方、衣類の着脱、おむつ交換など日々の保育で実践的に行われている内容であり、どの項目も必要性が高い

と考えられる。おんぶは乳児クラスでは用いられることも多いが、他の項目に比べると必ず必要とは思われていないと考える。

(4) 身体の清潔と鍛錬

身体の清潔では、沐浴、清拭とも夏季の時期など限られた時期に実践されることが多いため、あまり高くなかったと考えられる。乳児体操では、運動機能面だけでなく、情緒の発達面からもタッチング効果は大きいため必要性が高かったと考えられる。外気浴は、皮膚の鍛錬や外気に触れることによる体温調節機能の発達という観点から考えると必要性が高いと思われる。しかしながら、時間帯の検討など皮膚への影響を考えながらの実施が必要である。

(5) 食事の与え方と看護技術

授乳・離乳食とも日常生活への援助として必要性が高いためと考えられる。離乳食は、口腔の発達に伴い、咀嚼機能の発達を踏まえた援助が必要と考える。また、授乳・離乳食共に健康生活を築いていく食行動の習慣化の獲得に重要な項目であろう。また、授乳では、哺乳瓶の消毒法を学習することは、感染予防の観点からも重要と考えられる。

次いで薬の与え方では、健康の回復過程で服用している子どもも多く、必要性が高かったと考えられる。また、年齢に応じた服用方法を用いることが必要なため、高かったとも考えられる。浣腸は、こより浣腸など直接刺激に関しては、家庭内の育児においても実践されているが、薬物を用いる直接的な行為は医療行為にあたるため、実際にされることは少なく必要性は低かったと考えられる。

(6) 応急処置

応急処置では、心肺蘇生法の人工呼吸や心臓マッサージの項目が高いのは、早期の対応が求められることから技術の習得は、保育者として必要要件と認識しているためと考えられる。次いで異物・誤飲の処置・外傷の処置・熱傷の処置については、緊急性が高いため、必要性が高いと考える。これらの項目は、屋内外での事故の中でも頻度が高いためと考えられる。

(6) 演習が必要と思われる項目について

健康な児への生活援助では、歯磨きは『必要あり』が7割弱を占めており、日々の保育の中で毎日行われているために高かったと考えられる。

罨法は、若干冷罨法の方が発熱に伴う処置として必要性が高いと考えられるが、現在、冷却ジェル状の高分子ポリマーを塗布した不織布のシートを用いられることも多く、簡便性に優れているため、従来からある罨法に対しては、必要性は低かったと考えられる。

対症看護では、発熱は『必要あり』が5割弱であり、子どもの救急来院時の上位を占めていることから必要性が高いと考えられる。発熱時は冷罨法だけでなく、水分補給など看護全般の知識の習得の必要性を挙げていると思われる。次いで発疹については、小児期は感染症に罹患する時期であり、予防接種が進んでいない年少児の場合、集団保育では発疹を伴う感染症に罹患することが多いと思われる。そのため、発疹の鑑別の必要性が高かったと考えられる。また、他児への感染予防の観点からも発疹の観方が重要と考える。

応急処置およびけがでは、演習の必要性についてけいれんに関する項目が7割以上を占めている。けいれんは発作的に起こることが多く、状態の観察や窒息予防のための安全の確保が早急に求められるために多かったと考えられる。その他の項目では、一般的に必要性は高くなかったと考えられる。

2) 「小児保健実習」の授業内容の検討

乳幼児期は、生涯にわたる人間形成と健康の土台ができる重要な時期である。子どもが健康で安全な生活をできるように小児保健を実践し、健やかに成長・発達を遂げていくことが必要であろう。保育所保育指針⁷⁾では、健康・安全に関する留意事項について①日常の保育における保健活動（子どもの健康状態の把握、発育・発達状態の把握、授乳・食事、排泄、健康習慣・休養・体力づくり）、②健康診断、③予防接種、⑤疾病異常時等に関する対応、⑥障害児に対する保育、⑦環境保健 ⑧事故防止・安全指導、⑨家庭・地域との連携を挙げている。

以上の指針から検討していくと、本学の「小児保健実習」の授業内容は、乳幼児の健康・安全を

守る観点からは、必要性を満たしていると考えられる。しかしながら、演習を伴う授業であるため、講義・演習と時間的に限られた中で学生が具体的な理解を得るためには、今回の調査で明らかになった必要性の高い項目である子どもの健康の状態の把握や疾病・異常時の対応については、より重点的で具体的に理解出来、小児保健の基礎的技術が習得出来るように授業方法の検討が必要と考えられる。その一つとして、保育所等で罹りやすい病気の事例を用いながら演習を進めていくことも方策と考えられる。

次いで保育所では、集団保育が行われており、事故防止の観点から保育環境を整え、事故を防ぐための安全教育や安全管理が年間行事に盛り込まれている。子どもは、危険を回避するための状況判断や運動機能が発達途上であることから事故予防は、保育上重要な課題であろう。幼児期の死因の第一位に不慮の事故⁸⁾が挙げられ、全死因の3割を占めている。このような事故を防ぐためには、環境整備と安全教育が必要であると思われる。さらに、事故への対応として初期手当を学ぶことは、その後の経過に影響することから保育者には、基礎的技術として必要な要件と考えられる。そのため、事故の起こりやすい場面を設定し、対応を系統的に理解できる授業方法の検討が必要と言えよう。

以上より、保育者の視点から「小児保健実習」の授業内容について検討した。学生の捉えた視点⁹⁾では、健康な児への生活援助の項目である抱き方やおむつ交換、体温測定の必要性が高い。保育者の調査でも同様の結果が得られたことから、健康な児への生活援助では、実際に子どもに触れる機会は少なく体験が乏しい学生の背景を踏まえて、十分反復学習ができるような演習方法も必要と考えられる。

今回の調査内容では、大泉門・皮下脂肪・浣腸の3項目の必要性が低い。大泉門の変化は異常の早期発見時の気付きとして重要であり、皮下脂肪は、乳幼児時期の肥満が増加傾向にあることから学習する意義は高いと考えられる。また、浣腸は、排泄への援助に関係しており、乳幼児の便は健康を判断する重要な意味をもち、便秘などの対

応法として学習は重要である。しかし、3項目とも実際の演習ではなく、講義で確認する方法へと変更することも今後検討したい。

3) 「小児保健実習」の今後の方向性

今回、保育の専門職育成の授業内容について検討してきた。保育者には、新エンゼルプランにより、多様な需要に応える保育サービスの推進や在宅児も含めた子育て支援の推進など少子化対策に伴い保育所内だけでなく、地域の子育て相談など役割の拡大¹⁰⁾が求められており、基盤である小児保健の知識は重要である。専門職の保育者の調査で明らかになった必要性の高い項目は、必ず習得しなければならない小児保健の基礎的技術として、今後も分かりやすい授業方法を心掛けていきたい。

6. 結論

幼児教育学科の「小児保健実習」の授業内容について保育者の視点から調査した。その結果、以下のことが示唆された。

- 1) 健康児への生活援助では、成長・発達の指標となる身長・体重・胸囲測定に関する項目の必要性が高かった。また、健康観察では、子どもの健康状態の把握となる体温・呼吸測定に関する項目が高かった。
- 2) 病気と異常時の対応では、事故に対する初期手当の方法に関する項目の必要性が高かった。
- 3) 今後の授業内容として必要性の低い項目は講義のみとし、必要性の高い項目は、保育者にとって小児保健の基礎的技術の必要要件と考え、具体性をイメージし確実に習得出来るよう事例や事故の起こりやすい場面設定を用いた授業方法の検討が必要と考える。

研究の限界

今回の調査は、対象者数が少ないことや対象施設が1施設のみであったことなど研究の限界がある。しかしながら保育の専門職の参考意見として貴重なご意見をいただくことができたと考える。今後は、今回の結果をもとに対象者数を増やしていくと同時に授業内容の検討を継続していきたい。

謝辞

アンケートにご協力いただいたA保育園の先生方へ感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 石井博子他：保育施設での事故防止と発生時の対応、チャイルドヘルス、6 (2)、9-15、2003.
- 2) 堀井千代子：小児保健－学ぶこと教えることを考える⑤保育士の立場から、小児科臨床第53巻、増刊号、263、2000.
- 3) 今村栄一・巷野悟郎編著：新・小児保健、診断と治療社、45、2003.
- 4) 高内正子編著：保育のための小児保健、保育出版社、13、2001.
- 5) 国民衛生の動向・厚生指針：厚生統計協会、50 (9) 402、2003.
- 6) 前掲書5) 98

- 7) 母子愛育会・日本子ども家庭総合研究所編：最新乳幼児保健指針、日本小児医事出版社、322-326、2002.
- 8) 前掲書5) 402
- 9) 貞岡美伸他：「小児保健実習」の授業に関する調査—学生の保育実習後の認識—、新見公立短期大学紀要第25巻、179-186、2004.
- 10) 高野陽他編集：母子保健マニュアル第5版、南山堂、24、2004.

参考文献

- 1) 鯨坂二夫監修：小児保健実習、保育出版社、2002.
- 2) 田中哲郎著：新子どもの事故防止マニュアル、診断と治療社、2000.
- 3) 吐山ムツコ編集：乳幼児保健、西日本法規、1996.

Summary

We have examined the contents of “Child Health Practice” in the Department of Early Childhood Education with the lecture evaluation by the early childhood education students. All the students think it necessary to learn about baby food feeding. Many students feel the necessity of knowing how to measure children’s height, weight and the chest circumference which indicates children’s growth and development. Many of them also realized the necessity to learn about taking body temperature and counting the respirations which index children’s health condition. They also have needs to learn about first aid in accidents. We would like to make the use of this evaluation and better the contents of “Child Health Practice.”